

リアルドリーム文庫

囚われた人妻捜査官
母娘 奴婢・黒い淫獄
裕美子
ゆみこ

筑摩十幸

挿絵 / asagiri

試し読み版



Contents

目次

第一章	監獄の美囚	4
第二章	魔獣蹂躪	55
第三章	奸計縛鎖	119
第四章	黒い受胎	175
第五章	愛牝誕生	261

登場人物

Characters

羽村 祐美子

(はむら ゆみこ)

捜査課長として麻薬組織と戦う三十五歳。Fカップの肉感的なボディラインに流麗な顔立ちを持つ、意志の強さと上品さを兼ね備えた美女。一人娘のいる人妻。

羽村 楓

(はむら かえで)

祐美子の実娘。H女学園に入学したばかりの快活少女。やや小柄ながら日に焼けた肌が健康的な魅力を醸し出す。母娘関係は良好で母である祐美子に憧れを抱いている。

ボブ

黒人の殺し屋。祐美子の父の仇。二メートル近い長身に、異様なまでに発達した筋肉が鎧のように全身を覆っている。巨根、ワキガで強烈な牡の匂いを放つ凶暴な野獣。

金城

(きんじょう)

広域暴力団日向組の下部組織・青龍会の会長。八十歳くらいの痩せこけた老人ながら、マッドサイエンティストのような狂気を孕む。

中村

(なかむら)

祐美子の部下。薄い頭髪をせこせこと掻き上げる出っ歯の中年男。

第一章 監獄の美囚

バシッ！ ピシイイッ！ パシイイッ！

「うあつ！ うあつ！ ンくううっ！」

蒸し暑く薄暗い牢獄に、鞭の音と女の悲鳴が交互に響き渡る。コンクリート打ちっ放しの壁は厚く、わずかな脱出の可能性さえも断絶していた。

「オラッ！ オラッ！ オラアッ！」

バシッ！ バシッ！ パシイインッ！

鞭を振るうのは屈強な肉体を持つ黒人だ。逞しい筋肉を包み込む褐色の肌には興奮の汗が滲み出し、見開かれた瞳と、歪んだ笑みを浮かべる歯並びの白さが異様に目立つ。

「ああつ！ うううっ！ うくうっ！」

鞭打たれているのは逆さづりにされた全裸の美女。スラリと伸びた脚線や、むっちりとした熟れた臀部、Fカップはあるうかという豊満な乳房など、その状態でも抜群のスタイルの持ち主だとわかる。

「次は、こいつダ、羽村祐美子」

鞭を捨て、今度は刷毛を擦りつけていく黒人の男。

「うううぐぐっ……むああああうううっ！」

刷毛には塩が塗られており、ミミズ腫れが浮くほど痛めつけられた肌に、焼け付くような激痛を生む。

「グフフフ。苦しめユミコ、もつと苦しめ」

「く……う……うう……」

本来なら透き通るように美しい白肌も、鞭の痕で紅く染まり、夥しい汗で油を塗ったようにヌラヌラと濡れ光っていた。

「こんな事……なんとも、ありませんっ……ハアハア……うううっ」

苦しげなうめき声を噛み殺し、羽村祐美子と呼ばれた美女はキッと拷問人を睨みつけた。長い睫が飾る瞳は黒曜石のような光を放ち、戦う意思を見せつける。

町を歩けば十人中十人の男が振り返るであろう理知的な美貌も、今は壮絶な表情を浮かべている。しかしそれが美しさを損なうことはなく、むしろ彼女の内面的な美德、聖性とも呼ぶべき高貴さを醸し出してもいた。

「フフフ。イイ根性だナ。電流を流せ！」

抵抗すら楽しむ様子で次の拷問の指示を出す。

部下の男がレバーをガチンツと上げた、その直後――

バリバリバリバリイイッ！

「あきやああああああっ！」

けたたましい悲鳴が地下牢の壁を激しく叩いた。祐美子の身体には、乳首やクリトリスなどにクリップ形の電極が取り付けられており、そこへ高圧電流が流されたのだ。「ヒイッ！ アヒイイッ！」

吊られた裸体がビクンビクンと感電しながら反り返り、黒髪が乱れて汗の滴が飛び散った。盛り上がったお尻も、しなやかなふくらはぎも、引き締まったウエストも、筋肉がデタラメに痙攣して引きつった。

後ろ手に縛られた拳がぎゅうっと握られ、つま先が開いたり丸まったりを繰り返す。網膜に七色の星が散って、意識がズタズタに引き裂かれていく。

「うわ、えげつない責めだな……」

「だ、大丈夫ですか、ボブ様。死んじまうんじゃ……」

情け容赦ない連続責めに、周囲の部下の男たちも躊躇するほど。だがボブはまったく余裕の態度で、タバコに火を着けている。

「止メロ」

「はあっ……はあっ……ああ……はああ……ああ……あう……」

ようやく電流責めが止まった時には、祐美子はぐったりと釣られた人魚のように全身を弛緩させていた。

「喋る気になったか？ ユミコ」

拷問が始まって六時間。未だに情報を得られていないが、黒人は歪んだ笑みを浮か

べていた。恐らく女性を苦しめ、虐げること自体に興奮を覚えるサディストなのだ。その証拠にズボンの前は、あり得ないほど大きく盛り上がっている。

「ハア、ハア……う……う……う……だ、誰が……話すもんですか……ハアハア……」

それでも気丈に祐美子は反抗を続ける。女を苦しめて悦ぶような悪党に屈するわけにはいかない。絶対に負けられない理由があるのだ。

「ククク。イイゾ、その顔。沈めロ」

ボブの命令で滑車がガラガラと回転し、祐美子の両足を吊っている鎖が降下する。

「やめ……あむうっ！」

ザブンと下に用意してあった水を張ったドラム缶に、頭から突っ込まされた。既に息も絶え絶えのところに水責めは、あまりにも過酷だった。

(あああ……死ぬ……し、死んじゃう……)

上半身を完全に水没させられ、あまりの苦しさにつま先がピクピク痙攣する。

(どうして……こんな……?)

朦朧としていく頭に、数日前の出来事が浮かんできた……。

「羽村さん！ 羽村捜査課長！」

車から降りた祐美子に、カメラとマイクを構えたマスコミが殺到する。

「今回も素晴らしいご活躍でした！」

「市民に向けて、どうか一言！」

近年、日向組ひめがという広域暴力団が勢力を拡大し、それに伴って全国で抗争が起こっていた。激しさを増す諍いの中で被害は構成員同士にとどまらず、一般市民も巻き込まれる事態に発展していた。また覚醒剤や大麻が芸能界やスポーツ界にも広く蔓延し、社会不安が増大していた。

そんな時、彼女が麻薬捜査特別課に配属され、多くの違法な組織を壊滅させていった。これまで逮捕した密売人は百人近いだろう。先頭に立って指揮を執る姿は女性とは思えないほど凛々しく勇敢であり、市民からの人気も極めて高い。

そしてまた、その美しい容姿も民衆の心をつかんでいた。意志の強さと上品さを兼ね備えた流麗な顔立ち。今年で三十五歳、女子校生の娘がいるとは思えないほど整えられたボディライン。漆を塗り重ねたような艶やかな黒髪……。

まるで神話に登場する戦の女神のように毅然としながら、すべてを包み込む地母神のような優しさも兼ね備えている。必然的にワイドショーの数字がとれると目論んだマスコミ連中も集まってくるのだ。

「市民の命と財産と安全を守るのは我々の義務です。私は捜査課の長として当然のことをしているだけです」

内心辟易としながらも、背筋をピンと伸ばして答える祐美子。目立たない濃紺のスーツに身を包んでいても、その存在感は抜群で、他の捜査官よりも注目を集めてしま

う。

「噂されている新型の魔薬『エンジェルフォール』についてはどうお考えですか？」

「薬物検査にもひっつかからないとか？」

「……必ず正体を突き止め、根絶してみせます。私がいる限り、この街で犯罪者に好き勝手はさせません」

毅然と答えたものの、エンジェルフォールに関しては正直、頭の痛いところであった。エンジェルフォールとは、主成分もいまだに不明、製造拠点も流通ルートもつかめていない謎の新型魔薬である。自我を失わせるほどの強い快楽を与え、人間をまるで生きた人形のような洗脳状態にしてしまうという。

これによって多くの女性が狙われ、強制的に風俗嬢やAV女優へと墮とされ、またあるときは性奴隷として海外に売られていった

さらに公表されていないが、捜査に送り込んだ女性潜入捜査官が行方不明となると、いう最悪の事態も起こっていた。

(あれだけはなんとかしなければ……)

多くの事件を解決してきた彼女であったが、真の目的は『エンジェルフォール』であった。

「最後に一つ！ 政界へ進出なさるといふ噂もありますが、本当でしょうか？」

「待った！ 事件以外のことは……」

男性捜査官が質問を遮ろうとした時

「我々は……私、羽村祐美子は……」

祐美子が口を開いた。

「市民を守る矛であります。しかし残念なことに、あの魔薬の問題も含めて、現在の司法、行政では対応しきれない部分もあるのです。それを変革する……別のアプローチ……盾の役割も、私の視野には入っています」

「おお、それではやはり……」

「特に若い女性への性暴力、これがひどい状況。先進国にあるまじき状態です。昨今では騙されて契約を結ばされ、無理矢理AVに出演させられるという被害が多いと聞きます。このような女性の尊厳を踏みにじるような悪事を、絶対に許してはなりません。違法な風俗とAVの根絶、これをマニユフェストの一つに掲げたいと思います」

「どよめきと同時に無数のフラッシュが瞬き、光の洪水を美人捜査課長に浴びせかけた。

「いやはや。課長、まずいですよ」

翌日。祐美子がデスクに着くと部下の中村なかむらがヒソヒソと話しかけてきた。

手にした新聞には「羽村祐美子、知事選に出馬表明」と派手な見出しが踊っていた。「選挙のことは地盤が固まるまで伏せておくようにと、大沢先生おおさわから言われていた」

やないですか」

薄い頭髪をせこせこ掻き上げる出っ歯の中年男。祐美子が着任する前から捜査部にいた男で、あまりぱつとせず、仕事も大してできない冴えない男だ。自分を見る目が妙にいやらしく感じられるのは、気のせいだろうか。

「いずれわかることです。大沢先生には私から謝っておきます」

つい口が滑ってしまったのだが、後悔はしていない。これは祐美子にとって宿命とも言える戦いなのだ。

「まあ、大沢先生とは課長のほうが付き合いも長いでしょうからね」
「……………」

卑屈な笑みを浮かべる中村がデスクから出て行く。と、それを待っていたかのように携帯電話のベルが鳴った。果たして、大沢からだった。

その日の夜。

「お母様、スゴイ。もう学校中で噂だよ」

夕飯の支度をしていると、娘の楓かえでが興奮気味にじゃれついてくる。今年日女学園に入学したばかりの快活な少女だ。テニス部に所属しており、日に焼けた肌が健康的な少女の魅力を引き立てている。一年生にしてはやや小柄で胸なども発育途上だが、それもこの体育会系少女には似合っているとと言えるかも知れない。

自慢の母親を見つめる瞳は期待と矜持に満ちて、キラキラ輝いている。

「僕も驚いたよ。こんな新聞やテレビでニュースになるなんてね」

いつもは冷静な夫の圭三も興奮気味だ。文筆業を営む彼はもっぱら主夫業もこなしてくる。多忙な祐美子にとっては、身も心も癒やしてくれるなくてはならない存在だ。もともと淡泊なほうで、祐美子が課長に昇進し忙しくなってから夜の夫婦生活はすっかりご無沙汰となり、そこがちよっぴり物足りないところではあった。時には少し強引に……と思う時もあるが、優しい夫にそれは期待できないところだ。

「あ、見て見て。またニュースやつてるよ」

ちようどテレビではそのニュースをやっており、楓は喜んでいるが祐美子には面映ゆい気持ちだ。

「そう言えば大沢先生は？ まさか対立なんてことはないよね」

大沢はかつて祐美子の父が代議士をやっていた時、秘書だった男だ。

父が亡くなった後、その地盤を引き継ぐ形で立候補し当選した。一家の大黒柱を失って困窮していた祐美子たちを支援してくれたのも彼なのだ。

「それが地盤も譲って応援してくれるって。私は違う区から立候補するつもりだったけど……。ついにこの時がきたのかって、感慨深そうだったわ」

「へえ、おじさまったら心広い。カッコイイ！」

「まあ、そうだろうね。地元の人たちも君を待ち望んでいたんだ。期待に応えるのも

いいんじゃないかな」

「そうね、でもちよっと大袈裟かも」

ちらつと見たテレビ画面には「仇討ち」などの勇ましいテロップが上がっていた。

二十年前、祐美子の父は暴力団追放運動の先頭に立って活動していた。暴力と賄賂で荒れていたこの街がクリーンで、誠実な雰囲気生まれ変わったのは彼の功績が大きい。

しかしその代償は大きく、自家用車に仕掛けられた爆弾で暗殺されてしまった。犯人は暴力団日向組に雇われた傭兵崩れの男だと言われているが、事件後海外へ逃亡し今も捕まっていない。

祐美子が捜査官を目指したのも、憎き日向組を壊滅させるためなのだ。

(でも……)

しかし祐美子がいくら頑張ったところで、所詮は一個人の力。できることには限界があった。トカゲのしっぽ切りというが、いくら末端の組織を潰しても、日向組本体には近づけない。

(そう……私の闘いは、これから始まるのよ)

政治の世界から、より大きな力で巨悪を叩く。宿命の対決は新たなステップを踏み出すのだ。

「あ、お母様。また恐い顔してる」

「え？ あら、ごめんさい」

娘に指摘され、慌てていつもの優しい母と妻の顔に戻る。幸せな今の家庭に、過去の陰惨な思い出を持ち込みたくない。

「うん、そうそう、お母様は笑った顔のほうが魅力的だよ。ね、お父さん」

「ああ、そうだね。祐美子は笑顔が素敵だよ」

「も、もう。あなたまでっ。からかわないで」

冗談だとわかっていても、夫からそんなことを真顔で言われるとドギマギしてしまう祐美子だった。

「アハハッ。お母様、顔真っ赤だよ」

「も、もうっ！ いい加減にしなさいっ」

三人の明るい笑い声が、いつまでも響いていた。

数日後。『女性を守る会』が主催する講演会に招待された祐美子は壇上で熱弁を振るっていた。

「……このように、暴力団による犯罪は都市から地方へと移行しつつあり、地方捜査機関もこれまで以上の強化が必要だと思われます」

「そして子供や女性、高齢者といった社会的弱者を狙った犯罪が増加しているのも事実です。特に今問題になっている女性への売春やAVへの出演強要などは絶対に許せ

ません。この状況に対応するには、警察力だけではなく法の整備が必要なのです。そのため私は戦っていきたく思います」

挨拶を終えた祐美子に会場から大きな拍手が起こる。彼女たちはいずれ本格的な選挙活動を開始した時に、大きな後ろ盾となってくれるだろう。

心地よい高揚感に包まれながら階段を降りていと……

「キャ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ツ！」と絹を裂くような女性たちの悲鳴が鳴り響いた。

「何事かと振り向いて息をのむ。

「な………!!」

講演用のスクリーンに、全裸の女性が映っているではないか。さらにその女性の顔には見覚えがあった。

「あれは………け………剣崎^{けんざき}さん………なの………!!」

一年程前行方不明になった捜査官、剣崎^{きよみ}聖実^{せいじ}に間違いなかった。直接の面識はないが、有能な捜査官としてその名は各部署に伝わっており、祐美子もいつか共に仕事かしたいと思っていたのだが……。

『はあ、はあ………イイ………はあん………ぴちや、くちゅんっ』

鮮やかな刺青を彫られた裸身には、複数の男たちが群がり、女性器はもちろん、唇も肛門も、穴という穴を犯し尽くそうとしていた。

「止めて、早く止めなさい！」

「なん……ですって？ 私の家が!？」

クラツと目眩を感じ、倒れそうになるが必死に両足を踏ん張る。頭をよぎるのは二十年前の悪夢。

「急用ができましたので失礼します！」

駆け足で講演会を抜け出し、そのまま駐車場へ続くエスカレーターへ向かった。すぐに携帯電話を掛けたが、自宅はもちろん夫の携帯にも通じない。

「乗ります」

ちようどドアが開いていたエレベーターに慌てて飛び乗る。中では見慣れない黒人の男と二人きり。

普段の祐美子なら警戒しただろう。だがあのビデオと爆破の連絡で、完全に冷静さを失っていた……。

「ユミコだな」

「!？」

ハツとしたときには遅かった。ドスンと重いパンチをみぞおちに叩き込まれ、身体がくの字に曲がる。

(しまった……)

そのまま祐美子の意識は闇の中へ沈んでいった。

「起き口」

バリバリバリバリイッ!

「はひいっ! あきやああうううっ!」

強烈な電撃を浴びせられて祐美子は覚醒させられた。

「ハア、ハア……」

水責めの途中で失神してしまったのだろう。逆さ吊りからは解放されたものの、一糸まとわぬ姿で十字架に磔にされ、乳首とクリトリスには電極クリップが噛みついてゐる。まだまだ地獄の責め苦は終わりそうにない。

「なかなか頑張るのお、捜査官殿」

「!? あ、あなたは……?」

闇の中に小柄な人物が立ち上がる。年齢は八十歳くらいだろうか、痩せこけた牛乳瓶の底のような分厚い丸眼鏡の老人が、黒人の後ろから影のように現れた。頭ははげ上がり、着ている白衣もヨレヨレだ。さらにその背後に白衣とマスクを着けた助手のような連中を従えている。さながらマッドサイエンティストと言ったところだろうか。「儂は金城。青龍会の会長をやっておる」

「青龍会……」

その名は聞いたことがあった。主に横浜で活動し、日向組の下部組織で香港マフィアとの間を取り持つ形で利益を上げている。武器や麻薬の密輸、さらには女性の人身

売買や臓器売買までこなす凶悪な連中だ。

「こんなことを……いくら続けても無駄です……ハアハア……私は何も喋りません」
今は管理職ではあるが、肉体の鍛錬は欠かさない。それに元々は最前線で活躍した捜査官である。拷問に対する訓練も十二分に受けているのだ。

「そのような」

皺だらけの眼をさらに細めてつま先から頭のとっぺんまで、金城のいやらしい視線が何度も上下する。まるでナメクジが這い回っているかのようなおぞましさだ。

「データを」

「はっ。羽村祐美子三五歳。身長一六三センチ、体重五五キロ。スリーサイズは八八・六五・九〇。Fカップ。血液型はAB型。出産経験は一回です。健康状態も良好」

「う……」

いつの間に計測されたのか。助手が読み上げる数値は正確だ。

「フムフム。いい身体をしておる。乳もたっぷり膨らんで、肌のつやも申し分ないわい」

あれだけ激しく責められたにもかかわらず、祐美子の肌は雪のような白さと、水晶のような艶を取り戻していた。あたかも祐美子の不屈の精神を表しているかのよう。

蜂のように細くくびれたウエストから、下半身へと続くラインは極上の壺のように美麗。下腹や太腿には、鍛えられた筋肉の上に柔らかな女の皮下脂肪が敷き詰められ、

熟れた女の色気をムンムンと放っている。

「特に……この尻が良い」

背後に回った金城がニヤリと嗤う。十字架から大きくはみ出した双臂はムッチリと熟れており、皮下脂肪と筋肉とが絶妙の割合で生み出す、究極の双曲線を描いていた。「出産を経験すると女はより味が良くなる。動物的に、すなわち牝として身体が完熟されるのじゃ」

「牝だなんて……女性を馬鹿にするようなことを言わないでっ。あなたみたいな人は絶対許しませんっ。必ず法の裁きを下してあげます！」

あからさまに女を見下す態度に、激しい怒りを覚える祐美子。女の敵を具現化したような男に負けるわけにはいかない。

「いい顔をする。フッフ、熟れた肉体に金剛石のような高貴な精神……実に素晴らしい。実験用の牝としてぴったりじゃ」

「じ、実験ですって……？」

「そうじゃ。儂が独自に改良を加えた新型『エンジェルフォール』の実験じゃ。ヒヒヒ」

金城の眼が眼鏡のレンズの向こうでキラリと光る。

「従来のエンジェルフォールは主に肉体を淫らに改変していくものじゃったが、儂が開発しているのは、脳の中枢部に作用して強制的に発情させ、愛情を喚起させるモノ

じゃ。愛こそは人間の最強の感情であり、それを制御できれば、人間を思いのままに操れるというわけじゃ」

口元には狂ったような、醜く歪んだ笑みが浮かんでいた。

「ごく普通の主婦を暗殺者に仕立てることもできるぞ。フヒヒ、コイツを完成させれば、日向組における僕の権限はさらに拡大されるじゃろう。そのためにお前に協力してもらおうぞ」

神聖な愛という感情をコントロールし、意のままに操るなど狂気の沙汰だ。

「狂ってるわ……わ、私は……ハアハア……あなたの思い通りにはなりませんッ」

「それがなるのじゃよ。お前も観たじゃろう。元捜査官、剣崎聖実の姿を」

「く……剣崎さん……」

怒りや恐怖や驚きといった様々な感情が渦巻き、全身に鳥肌が立つ。気丈でプライドが高く、男すら圧倒するほどの格闘術も身につけていた聖実が、禁断の相姦に溺れるまで淫らな女に作り替えられてしまった。いまだに信じられない衝撃的な映像だった。

「ヒヒヒ。新型魔薬が完成すればお前はボブに夢中になり、どんなことでも言うことを聞くようになる。選挙に出ようなどと思わなくなるはずじゃ。ヒッヒッヒッ」

「ゲフフ……ユミコ」

黒人の拷問人がニヤニヤと嗤う。

「なんて恐ろしいことを……そんな事をされるくらいなら、舌を嚙んで死にますっ」
「そうはいかんぞ」

金城がパチンと指を鳴らすと、黒服の男たちに鎖をひかれて一人の少女が地下室に連れられてきた。

「ああっ！ 楓！」

「お母さん！」

なんとそれは愛する娘の楓だったのだ。制服姿に乱れはなく、まだ乱暴はされていないようだ。

「夫もまだ生きておる。警察の病院に入院しておるわ」

スマートフォンに映し出されたニュース記事によると、夫は重体とのことだ。

「あ、ああ……あなた……」

爆破事件で家族が生きていたのは幸いであったが、それを喜べる状況ではないことも確かだ。

「たとえ警察病院でも、農らの監視から逃れることはできん。家族の命は、お前次第ということじゃ。ヒヒヒ」

「うう……っ」

悔しげに唇を嚙む祐美子。聖実ですら墮落させられてしまった恐るべき魔葉。それに堪えられるか、まったく自信がない。だが家族を人質に取られては、逆らうことは

できない。

「わ、わかりました……言うことを聞きます……」

「だめよ、お母様！ 私のことはいいから、こんな奴らに屈しないで！」

母親譲りの気丈な性格で、徹底抗戦を訴える楓。普段なら誇りたくなる娘の態度だが、今は相手が悪すぎる。

「シヤラップ！」

黒人のピンタがバシッと弾ける。軽い一撃でも華奢な少女にとっては、顔が仰け反るほどの衝撃だ。

「やめて！ 娘にひどいことしないで！」

「ならば、新型魔葉開発のため実験用の牝になると誓うのじゃ。この誓約書を読み上げてもらおうぞ」

「くうう……」

これではまるで実験動物ではないか……人間扱いすらされないという屈辱と恐怖が胸を締め付ける。しかし愛する家族のため、今は堪えるしかない。

（落ち着くのよ……もうすぐ助けが来るはず……それまで堪えればいいのよ）

課長の祐美子が行方不明となれば、マスコミも黙っていないし捜査部も全力で動くだろう。わずかな希望を信じて、そこに賭けるしかない。もちろん賭け金は己の心と身体だ。

「わ、私……羽村祐美子は……ハア、ハア……人間としての権利をすべて放棄し……新型エンジェルフォールの……開発のため……じ、実験用の……め、牝に……なることを、誓います……うう……青龍会と金城様に……絶対服従し……どのような恥ずかしい命令にも従います……」

「ハアハア……万が一逆らったときには償いとして……ああ……か、解剖され……ぞ……ぞ、臓器売買に……かけられても……うう……文句はありません……うう……これでいいですよっ」

心臓が凍り付くような内容の誓約書を読み切ると、祐美子はギョツと唇を噛んだ。捜査官になって以来、これほどの屈辱は味わったことはない。怒りと悔しさで身体が震えるほどだ。

「よしよし」

そうしている間に、金城の手によって股間にルージュが塗りつけられ、人体実験と臓器売買の二枚の誓約書がクチュツと押し当てられる。

「あううっ」

「マン拓で契約成立じゃ。牝らしくていいじゃろう。ヒヒヒ」

誓約書と祐美子の顔を交互に見比べながら、嬉しそうに囁く金城。その目は人間を見る目ではない。完全に実験用の家畜を品定めする目つきだった。

「ああ……お母様……そんな……いや、いやあ」

学生であっても、人体実験や臓器売買の恐ろしさは理解できるのだろう。すっかり青ざめ、小さな身体をブルブルと震わせていた。

「大丈夫よ、楓。私はどんなことをされても負けません。必ずみんなを救い出してみせるから」

不安を少しでも取り除こうと、優しく微笑んでみせた後、祐美子は金城の方へ向き直った。

「約束は守ってもらいます。私の家族には指一本触れさせません！」

「フフフ。いいじゃろう。娘を奥の部屋へ連れて行け。やさしく丁寧にな」

黒服の男に連れて行かれる娘を見送りながら、祐美子は硬く心に誓う。

(あなた……楓……必ず助けるから……待ってて……)

覚悟を決めた祐美子の心は、自分でも驚くほど平静だった。凜とした表情で十字架の上から宿敵たちを見下ろす。その姿は神々しい聖女のようなようであった。

祐美子は『実験室』と書かれた部屋に連れてこられた。暗く冷たい空気が充満しており、ここで命を落とした女たちの悲鳴が聞こえてくるような気がした。白衣の助手たちがジロジロとこちらを見ているのも不気味だ。

「フフフ。では早速始めるとしようかの。ボブよ、こっちへ来い」

祐美子の前に、あの黒人の男が仁王立ちする。身長は二メートル近いだろうか。

異様なまでに発達した筋肉が鎧のように全身を覆っており、首は女性のウエスト並に太い。肩や腕もアメフトの防具のように肥大して、指の一本一本にまでごつい筋肉と腱が発達している。腹筋は見事なまでにくつきりと六つに区画整理されていた。

それらを包み込む褐色の肌は油を塗り込んだように黒光りし、ワキガなのだろうか。ムンムンと強烈な牡の体臭を放っていた。まさに凶暴な野獣といったところだろうか。しかし祐美子を怖れさせるのは肉体だけではない。拷問を受けたからこそわかる嗜虐欲、凶暴性、残忍さ、そして女に対する異常なまでの執着。一生刑務所に閉じ込めて、社会から隔離すべき存在だと思える。

「その男がお前のツガイとなる相手じゃ。筋肉増強剤、ホルモン剤、あらゆる薬品を使って儂が鍛え上げたモンスターじゃよ。ついでに精力も絶倫よ。フフフ、これほど逞しい牡と相思相愛になれるのじゃから、嬉しかろう？」

「ラブユー、ユミコ。グフフフ」

ガマガエルのように下品に嗤うボブ。何の知性も感じられない、恐らく女を快楽の対象としてしか見ていない、最低最悪の男だ。こんな男を好きになるなど天地がひっくり返ってもあり得ないだろう。

「フン……馬鹿にしないで。私が愛しているのはあの人だけです。私たちの愛は永遠に変わりません。クスリなんかでどうにかなると思ったら大間違いです」
「フフン。いつまで頑張れるか見物じゃの」

壁に掛けられた拷問器具の中から、ガラス製の器具を選ぶ。大きめの注射器のような円筒の内部には薄桃色の液体が満たされている。刻まれた目盛りからすると容量は一〇〇ccくらいか。

「う……それは……まさか……」

「新型エンジェルフォルを十倍に薄めたモノじゃ。何しろ強力で、血管注射するとほとんどの女はすぐに発狂して壊れてしまったからの。少しずつ浣腸器で直注入するのがベストじゃよ」

「魔葉を……か、浣腸ですって？」

てつきり注射されるのだろうと思っていた祐美子は驚きの声を上げてしまう。針を刺されるのも恐ろしいが、浣腸も同じくらいおぞましい。何より排泄器官を責められる羞恥は、他にはないものだ。

「もちろん肛門の性感開発も兼ねておる。フヒヒ」

浣腸器を愛おしげに手で撫で回し、ニタニタと嗤う金城。本当に女の尻を責め、辱めることが好きなのだろう。

「さあ、そこが上がって四つん這いになれ」

指さす先には跳び箱のような形をした革張りの台があった。

「うう……」

悔しくても惨めでも、今の祐美子に逆らうことは許されない。唇を噛みしめながら、

拘束台に俯せに乗る。

「大人しくしろよ、捜査官様よ」

「それにしてもいい女だ。楽しみだぜ」

助手の男たちが、素早く祐美子の手足を拘束台のベルトで固定していく。馬の背にしがみつくような格好で、お尻は後方に突き出されている。これでは恥ずかしいところが全て丸見えになってしまう。

「ヒヒヒ。なんともいい尻じゃ。スベスベしてムチムチして、たまらんわい。無駄な贅肉ではない、上質な女の脂が乗った極上霜降り肉と言ったところじゃな。ヒヒヒ」
舌なめずりしながら双臀を撫で回し、感嘆の声を漏らす金城。

「肛門もいい感じじゃ」

深い谷間の底にひっそりと息づく可憐な花。綺麗な放射状に広がった皺に乱れはなく、桃色を含んだセピア色の粘膜もとても柔らかそうだ。恥ずかしそうに、時折きゅつと窄まる仕草は、締め付けの良さを期待せずにはいられない。

何十年にも渡って女体を使って淫らな実験を繰り返してきたが、これほど見事なアヌスは数名もいなかっただろう。間違いなく最高レベルの逸材、希少なダイヤの原石だと言えた。

「うう、見ないでっ……そんなところっ！」

カアツと頬が焼け付くように熱くなる。女にとって肛門を見られるのは、性器を見

られる以上に恥ずかしいことなのだ。これまで出産の時以外、他人の目に晒したことはない排泄器官を息がかかるほどの距離で覗き込まれて、全身の血が逆流しそうになる。

「こんな素晴らしい尻の穴を見ないわけにはいかんわい。徹底的に調教し、あの剣崎聖実にも負けない、最高のアナルマゾ娼婦に仕立ててやるぞ」

血走る目玉をギラギラさせながら、嘴管をアヌスにスツと突き入れた。

「くうっ！ いやっ！」

「暴れるとガラスが割れて、大変なことになるぞ」

牽制しながら、シリンドラーを押し込んでくる。

「あ、あああ……やめなさい……うう……いやよ……やめ……つ、冷たい……あああうっ！」

チュルチュルと魔薬液が注入されてくる。冷たく異様な感覚に、お尻から背中までサアツと鳥肌が立った。

「ヒヒヒ。五〇……六〇……七〇……まだ実験段階じゃが、これだけで百万円くらいはするのじゃぞ。ありがたく飲み干せえ」

「う、うう……そんなもの……もう入れるなど言って……うううっ……はあはあ」

直腸内に広がる冷たさは、すぐさまジワツと広がる熱に変わった。

（何……こ、この感じは……？）

続けて強いアルコールを飲まれたような酩酊感が、身体全体を包み込む。頭の芯が痺れて、全身から力が抜けていく。拘束台に突っ伏したまま、ハアハアと喘ぐことしかできなくなつた。

「よし、効いておるようじゃな。ヒヒヒ」

一〇〇ccすべて注入し、浣腸器を引き抜く。高価な新型魔薬を飲まれた肛門はすぐさまキュツと窄まって、清楚なたたずまいを取り戻していた。

「ううっ……こ、これくらい、なんともありませんっ……ハアハア……私は……特殊な訓練を……受けていますッ……ハアハア……卑劣な……ク、クスリなんか……効きませんっ」

捜査官の意地とプライドが、このまま悪に屈することを許さない。家族や聖実のような犠牲者を救い出すまで、何があっても負けるわけにはいかないのだ。

「ほほう。十倍に薄めてあるとは言え、たいしたものじゃわい。これは責め甲斐があるというもの。フヒヒ」

祐美子に睨まれても、金城はその抵抗を楽しむかのように嘲笑う。

「どれ、味を確かめてみるか」

「ひっ!! な、何を……あああっ!」

尻タブに近づく吐息を感じて慌てて振り返ると、金城が舌を伸ばして迫ってくるではないか。なんとか逃れようとしても、拘束ベルトはまったく緩まない。黄ばんだ歯

並びの中から伸びる長い舌は、毒蛭のような気味悪さだ。

「クフフ……これが……羽村祐美子の尻の穴か……」

「はうううつつ！　だめ……ああう……や、やめてっ！　そんなところ、汚い……あああっ！　気持ち悪いっ！」

ピチャツと舌が触れた瞬間、悪寒が背中を走り抜けサアツと鳥肌が立った。しかし逃れるすべはなく、括約筋を締め付けるのが精一杯の反抗だ。

「うむ、美味じゃ。最高の味じゃ」

鼻を尻の谷間にねじ込むようにして、祐美子の尻を味わい尽くそうとする金城。

ピチャ、クチュ……ピチャピチャアツ。

「う、ああ……やめ……やめなさいっ……はひっ……いやらしい男！　くうううっ！　あなたは……さ、最低の変態です！　あはあうっ」

いやらしく舌が上下するたび、くすぐったいような異様な感覚が、気も狂わんばかりの羞恥と共に駆け上がってくる。かつてない感覚に驚いた尻タブが、きゅつとえくぼを刻んで強ばるが、金城の舌は吸血蛭のようにびったり吸い付いて離れない。

「気持ちいいじゃろう。やがてここは、性器をも超える快楽の泉と化するのじゃ」

「あうん……馬鹿なこと……言わないで……はああああ……ハアハア……そんなこと……あるはずないでしょっ……うううっ……もう、しつこいっ……いつまで舐めて……あああ！」

口の周りをペロリと舌なめずりしながら、丸眼鏡を光らせる。

「ハアッ……ハアッ……ち、ちがいます……感じてなんかいません！　ううう……っ」
拘束台に顔を擦りつけ大きく喘ぐ。いつしかうなじは汗ばみ、ほつれた黒髪を張り付かせていた。

「グフフ。こつちを見ろ」

気がつくどボブが前に立ち、ズボンを下ろして、肉棒をつかみ出していた。

「ッ!？」

あまりの巨大さに目を剥く祐美子。拘束台はちょうどボブの腰の高さに合わせてあり、文字通り目と鼻の先である。

(な、なんて大きさなの……)

長さも大きさも夫の倍近くあるのではないだろうか。黒光りする亀頭は鶏卵より一回り大きく、ミミズのように太い血管がのたうつ胴部も子供の腕くらいのとさと長さだ。根元に重そうにぶら下がる陰囊に収まっているのは、恐らくキウイくらいあると思われる睾丸だ。うっそうと茂る陰毛はジャングルのようで、ツーンと鼻を突く性ホルモン臭が漂ってくる。

「舐めろ」

「い、いやですっ。そんな不潔なこと！」

「夫には毎晩していたじゃろう？」

「そ、そんな変態みたいなこと、私たちはしませんッ！」

祐美子も夫も奥手で、そちらには疎かった。もちろんそういう行為があることは知っていたが、自分とは無縁の話だと思っていた。

「ボブはお前の愛しい恋人になるのじゃからな。しつかりサービスして唇の処女を捧げてやれ」

「ううっ……いや……恋人だなんて……穢らわしい……うくう」

頬にグリグリと押しつけられ、慌てて歯を食いしばる祐美子。愛してもいない男の生殖器官を口にするなど、絶対にあり得ない汚辱の行為だ。

「フン。それよりも汚いところを舐められて悦んでおるくせに。無駄な抵抗はやめて、口を開くのじゃ」

「悦んでなんて……ああ……いません……う、ううんっ」

祐美子のがっしりと歯を噛み縛って侵入を許さない。

人質を使って脅迫されれば何も抵抗できないのだが、それは敵にとつても奥の手だ。最後のカードを切るまで、一分でも二分でも遅らせて、救出が来るまでの時間を稼ぐ。それが祐美子のとれる唯一の戦略だった。

「ならばこっちの口から調教を始めるでしょう」

指先にピンク色の薬品を塗り始める。もちろん魔薬入りのローションだ。

「ひっ、何を……きゃあっ」

肛門に違和感を感じ、頭が跳ね上がる。振り向くと金城がアヌスに指を突き立てているのではないか。節くれた枯れ枝のような人差し指が、ローションを潤滑にしてスムーズに潜り込んでくる。

ヌプッ……ヌプッ……ズプズプズプ……ッ。

「ククク。初めてのくせに、よくほぐれておるわ。ホレホレ、エンジェルフォールを直接塗り込んでやるからのお」

「あううっ……やめ……やめなさいっ……ひああう……気持ち悪い……抜きなさい！
うあああ……漏れちゃうっ……だ、だめえっ！」

自分でも触れるのをためらわれる箇所指を挿入され、内側まで愛撫されてしまう。魔薬浣腸でただれた肛門粘膜には、たまらない刺激だった。

「う、うあああ……あ、あつい……くううっ……焼けちゃうっ」

灼熱感と共に便意が膨れ上がり、全身の毛穴から汗が噴き出して、ベルトで拘束された手が白くなるほど拳をギュウツと握りこんだ。魔薬の濃度も高いのか、浣腸の時間以上に粘膜が焼き尽くされていく。

「良い反応じゃ。気持ちいいか？」

「ハアハア……そ、そんなわけないでしょっ！ ううう……気持ち悪いだけですっ！
「これからうんとよくなる。お前も舌を出して舐め舐めするのじゃ。抵抗していると、

このままぶちまけることになるぞ」

頭の先端からは、透明な汁がジワジワと滲み出して、まるで邪悪で不気味な異世界の怪物のよう。とても夫と同じ男性器とは思えなかった。

「カリの裏側も舐めるのじゃ」

「んつく……はあつ……ああん……カ、カリつて……はあつ……くううつ……こ、これでもいいの……？　ぴちゃぴちゃあつ……はああ」

亀頭の肉傘に舌を滑らせると、ピクッピクッと巨根が反応し、黒人が「オウツ」と気持ちよさそうな声を上げた。どうやらそこが性感帯らしい。

しかしそこには恥垢も溜まっているため、祐美子にとっては苦悶がますます大きくなるばかりだ。

「よしよし、次は陰茎の裏筋……尿道に沿って舐めるのじゃ」

抜き差しに回転も加えて、執拗に肛門を撚る金城。ただ責めているわけではなく、祐美子の肛門構造を理解するための触診も兼ねているのだ。

「ううつ……や、やるから……はあはあ……もう指を抜いてつ……うう……くちゅくちゅんっ」

生まれて初めての肛門調教に喘ぎながら、黒い巨根の下に頭を潜り込ませる。コンクリートのように硬い胴部の裏側に、少し柔らかい部分が縦一本に走っていた。ぷつぷつと膨らんだ感触のソレが、尿道に違いない。

「はあつはあつ……ぴちゃ……べろっ……れろっ……あああ……はああうん」

どす黒い巨根は天を突くようにそびえ立っており、自然と下から仰ぎ見るようにして奉仕する格好になる。

（す、すごい……なんて……大きい……こんなもので犯されたら……）

そのせいでペニスはより雄大に、圧倒的迫力で目に映り、祐美子は本能的に威圧される思いだった。想像するだけでまだ犯されていない聖域がズキンと疼いてしまう。

「キンタマも舐めてもらおうかの」

「あくう……うう……く、くさい……うむむ……っ」

根元の陰毛が密集する地帯に近づくと、さらに体臭がきつくなった。まるで獣のような臭いが鼻腔を突き抜け、目に染みる。思わず涙が滲むほどキツイ臭いだ。

さらに陰毛も一本一本がまるで針金のように太く、それが舌に絡みついてくるのだからたまらない。嘔吐感が繰り返し襲ってきて、胃がひっくり返りそうだ。

「唇で玉を包み込むようにするのじゃ。そこにはお前を孕ませる子種がたっぷり溜まっておるからのお」

魔薬ローションを塗った指を二本に増やして、ズブリと肛径を抉る。

「あううっ、いたいっ……ああ……裂けちゃうっ」

肛門粘膜をむごく拡張され、祐美子は羞恥と屈辱に美貌を歪めた。老人の指は閥節が際だっており、ゴツゴツと擦れる感じがおぞましかった。

「クスリが効いておるから、そんなに痛くはないはずじゃ」

抗議などまったく無視して肛門責めを続行する。二本の指は根元まで完全に、祐美子の中に没していた。

「初めての調教で金城様の指二本くわえ込んだぞ。さすがエンジェルフォルダな」「それもあるが、あの女の尻が相当な名器って事だろう」

助手たちが覗き込み、興奮気味の感想を交換している。アナルバージンの祐美子がきつい金城の責めを受け入れていることが驚きだ。女の扱いに慣れた彼らにとっても祐美子は極上の獲物であり、貴重な実験材料なのであった。

「うろう……ク、クスリなんか……効かないと……あああ……言ってるでしょう……ハアハア」

「そうかそうか。さすが捜査官様じゃのお。それでこそ責め甲斐があるというもの。ヒヒヒ」

皮肉っぽく嗤いながら、魔薬をさらに奥にまで塗り込むようにねちっこく責め立てる金城。

指先に感じる感触は単なる排泄器官ではない。指を食いちぎらなければ十分に締め付ける収縮性、それでいて時折見せる包み込むような柔らかさ、明らかに極上の名器の素質を秘めた牝肉であった。感受性も豊かなようで、初めてなのにすぐ下の膣肉はしつとりと潤いを湧かせ始めている。

「これほどの名器を持っていながらまったく触れられていないとは、もったいない。

なんとしても僕の手で感じさせて、開花させてやるぞ」

「あうう……何をしても無駄です……ハアハア……あううっ……お尻なんかで……絶
対感じたりするものですか……はあああつ」

否定するものの、アヌスから奇妙な疼きが波紋のように広がり、そのたびに背筋が
ビクツと震えてしまう。呼吸も徐々に乱れ、腋の下もじんわりと汗ばんできた。

（うう……私の身体……どうなって……）

それに加えて、今にも失禁してしまいそうな切迫感が直腸いっぱい膨れ上がる。
かといって肛門を閉めれば、金城の穢らわしい指を強く感じるようになってしまう。

（うう……とにかく……早く終わらせないと……）

諦めて分厚い皮に包まれた睾丸を下からぱくりと口に頬張る。ズシツと顎に感じる
重量感や睾丸の大きさに驚かされ、牡としての生殖能力を思い知らされる。万が一こ
の男に犯されるようなことがあれば、一回で妊娠させられてしまうのではないか。

「う、ぐ……むうう……はああ……んむちゅ……じゅばあ……はああ」

何度もえづきながら、屈辱奉仕を続ける祐美子。

（ああ……頭が……だんだん……ポウツとして……）

魔葉の効果が徐々に出てきたのか。嫌悪感や抗おうという気持ち之急速にしばんで
いく。瞳は理性の光を弱めて、命じられるままに陰囊への愛撫を行い続ける。

「オオ……イイゾ……ユミコ……グフフ」

一旦ペニスを離してボブが嬉しそうに嘔っている。もちろん祐美子のテクニクは稚拙で、とても満足いくモノではないだろう。

それでもとびきり美しく上品な人妻が、一生懸命己のペニスを磨き上げている姿には、欲情せずにはいられない。

「よし、そろそろくわえロ」

「えっ？　ンああ……あむううっ！」

ハッと我に返った時には、唇が巨根によって押し広げられていた。

「むぐう……い、いひや……あむっ……ひやめ……んぐぐうっ」

慌てて口を閉じようとしても遅かった。楔のように侵入した亀頭が、抵抗を無視して荒々しく押し入ってくるのだ。

（ああ……なんなのこれは……お、大きい……大きすぎますっ！）

先端だけでも顎が外れそうな巨大さに口腔が埋め尽くされる。せめて噛みついてやろうかと思うのだが、すでに身体は魔薬に冒されてしまったのか、あらゆる筋肉が脱力しつつあった。

「もっと、口を開けロ」

「んぶうう……くふうう……いや……あふう……ひやめ……あおおお……うううん」

あまりにも長大なため、今の祐美子には亀頭部をくわえるだけで精一杯。小鼻を惨

めに膨らませて、苦しげな呼吸を繰り返すばかり。息苦しさを物語るように、拘束台に固定された手や脚に痙攣が走った。

「フフフ……順調なようじゃな」

祐美子の様子を冷静に観察する金城の眼が光った。

上の口は苦しみながらもボブの超巨根を迎え入れ、肛門も金城の舌と唇の愛撫でいやらしく濡れ光り、今では指二本を余裕でくわえ込んでいた。

「あの……いい、いかがですか金城様。祐美子の尻の穴の具合は？」

待ちきれないと言った様子の助手たちが拘束台を取り囲み、ふくよかな祐美子の双臀をのぞき見る。

「最高じゃ。これほどの尻は見たことがない。お前たちも少し触ってみるか？」

機嫌が良さそうな金城は、アヌスから抜け出させた指をペロリと舐める。

「よ、よろしいのですか！」

「指だけじゃがな」

「オオッ、やったぜ！」

金城の言葉に驚喜し、十人の助手が祐美子の後ろに一列に並ぶ。

「では俺から……へへへ」

魔薬ローションを塗った指先を、ヌラヌラ輝く窄まりの中心へ押し当てていく。

「うあ……ああ……ううっ」

どんなに括約筋を締め付けても、指の侵入を防ぐことはできなかった。抵抗はあっさりとは碎かれて、野太い男の指をくわえ込まされてしまう。

「オオオ、こ、これは素晴らしいアヌスだ！　なんという温もりと柔らかさ……最高ですよ！」

「そうじゃろう、そうじゃろう」

「ううむ、ずっとこうしていたいけれど……」

二度三度とかき混ぜた後、男は名残惜しそうに指を引き抜いた。

「うううっ」

本当に実験動物にされてしまったような屈辱に呻く祐美子。しかし恥辱の触診は始まったばかりだ。

「どれどれ、次は私だ」

「なんていい手触りだ。本当にコレは肛門なのか」

助手たちは代わる代わる指を挿入し、祐美子の中を弄んでいった。長い指、細い指、ごつい指……様々な男の指で押し開かれ、かき混ぜられ、調べられる。

「ンああ……ハア……ハア……ううんっ」

次から次へと男たちの指をくわえさせられ、既に百ccほど浣腸されている肛門内をかき混ぜられていく。そのたびに粘膜はますます敏感になり、得体の知れない疼きも大きくなっていく。グルグルと鳴動し、過激に荒れ狂う便意も祐美子を苦しめた。

(こんなことで……負けない……私は……絶対に……)

頬張らされた巨根に悲鳴さえも封じられたまま、拘束台の上で身を強ばらせ、堪え続ける美しき女捜査官。

「ハアハア……うう……もうひやめなさい……はあう……むう……」

十人全員の触診を終えたときには、祐美子は息も絶え絶えに追い込まれていた。そのたびに追加で塗り込まれる魔薬ローションの効果も絶大で、意識が朦朧としてきた。「ホッホッホッ。良い具合にほぐれてきたな」

バターを塗ったように妖しく輝く菊華に眼を細める。だがあれだけの責めにもかかわらず、中心は硬く窄まったまま、決壊を防いでいた。魔薬に対する精神と肉体の潔癖さは、金城が舌を巻くほどだ。なんとしても家族を守りたいという祐美子の気持ちの表れだろう。

「ふうむ、それにしてもここまで堪えるとは、たいしたものじゃ。この先どう変わるのか……本当に楽しんじゃわい」

「……ボス。俺もユミコの尻を……」

「焦るな。いきなりお前の相手では壊れてしまうからのお、後のお楽しみじゃ。準備ができるまで待っておれ」

焦れつつそうにしていたボブだったが、金城の意味深な言葉に一応納得したようだ。「ではもう少し追加してみるかの」

拘束台の上でお尻がギクンギクンと跳ね、強ばる指先が拘束台をギリギリと引つ掻いた。白い背中に夥しい汗が噴き出して、滝のように流れ落ちていく。

「激しいのお。じゃが漏らすんじゃないぞ。なんと言っても四百万円分じゃからな」
便意を押し戻すようにして注入される魔薬浣腸液が、祐美子の腸内でぶつかり合い、渦を巻く。いくら身体を鍛えていても内臓までは鍛えられない。どうやって堪えれば良いのかもわからず、ひたすらお尻を左右に振りたくるばかりだ。

「オオオウ……いい声ダ。もつと鳴ケ、牝」

興奮したボブが頭を両側から押さえながら腰を振り、巨根をさらに深くねじ込もうとする。

ズブツ……ズブツ……ジュブブツ……ズブリツ！

「おおっ……んむっ……ふぐっ……あむううっ！」

舌を巻き込みながら、喉の奥をガンガンと突き上げるイラマチオで目眩を感じるほど。その上ボブの興奮に伴って鈴口からカウパーが大量に吐き出され、カリの裏からは恥垢がポロポロとはがれ落ち口中に広がった。味と臭いはさらに濃厚に、強烈になつて祐美子を悶絶させた。

（あうう……息が……苦しい……臭い……ああ、お腹が……苦しくて……し、死んじやうっ……）

まるでゾンビの腐った肉棒で食道を抉られているかのようで、胃がねじれそうな嘔

吐感が何度もこみ上げる。だがそんな苦しさの中にも、甘ったるいような奇妙な感覚が芽生え始めていた。

(なに……これは……?)

巨根に擦られる顎の裏側や舌の粘膜に、痺れと疼きがまざったような不思議な感じが広がってくる。頭の中が桃色の霧に包まれて、苦痛や苦しさが曖昧になってくるのだ。

「う……ううっ……むぐっ……ひやめ……はむう……あああむ、くちゅん……ろうして……こんな……はあああ……」

窒息しそうな苦しさも、喉奥を抉られる辛さも、鼻が曲がりそうな異臭も、だんだん気にならなくなっていく。意識は七色の迷宮を彷徨い、瞼が重く被さる瞳は、ぼんやりとボブの下腹を見つめている。

「やっ効いてきたようじゃな……さすが手こずらせるわい。フフフ」

拘束台の上でクツタリと横たわる祐美子を見て、金城とボブが顔を見合わせてニタニタと嗤った。ここまで新型エンジェルフオールに耐性を見せた女は初めてだったからだ。しかしそれは祐美子が優れた実験台であることの証拠でもあった。

「やれボブ。クスリが効いている間に、お前のデカマラの臭いと味を祐美子の心と身体に刷り込むのじゃ」

「オーケー、ボス」

祐美子により大きなダメージを与えようと、ボブはラストスパートに突入する。女性器を犯すような激しいピストンをか細い喉にむごく撃ち込む。

「あぐっ……むぐっ……おとおおう……き、効いてなひ……うぐっ……おとお……くしゅりなんか……私は……はむうっ！　んぐ、ふむうっ！」

氣力を振り絞って必死に抵抗を続ける祐美子。祐美子自身は気づいていないが、それまで亀頭をくわえるだけが精一杯だったのに、今は半分近く唇に没していた。

そして変化は身体の各所にも現れている。汗まみれの裸身がローションを塗ったようにヌメヌメと輝き、浣腸で責められている双臀もほんのりと色っぽいピンクに染まっていた。

「すげえ……見ろよあの尻を」

「ああ……なんて色っぽいんだ」

助手たちも作業の手を止めて祐美子に見とれていた。

ボブの腰ふりに合わせるようにして、金城がシリンドラーを小刻みに押し込んでくる。ビュッビュッとリズムカルに注入される浣腸が、今にも漏れてしまいそうな暴圧と、身体の内側で激しく衝突した。

（だ、だめえ……ああ、あついい……熱いのがあ、どんどん入ってくる……うう、漏れちゃう……だ、だめえ！）

いくら魔薬に冒されていても、人前で漏らすのは女としてプライドが許さない。全



身全霊の力を括約筋に集中させ、決壊を防ごうとする。必死なあまり、まなじりはつり上がり上品な柳眉も辛そうに折れ曲がる。

「ボブのチンポはデカくて臭かろう。じゃが、いずれそのニオイが大好きになる。そのデカマラも根元まで呑み込めるようになるじゃろうて。フヒヒヒ」

「んぶっ……むぐっ……あううう」

（いやよ……私は……そんな風にならない……!）

前後から挟み撃ちにされ、身も心も押し潰されてしまいそう。ボブの巨根に蹂躪されて顎は感覚がなくなるほど疲弊させられる。ドクツドクツと浣腸液が注ぎ込まれるたび、肛門粘膜は燃えさかる松明を突っ込まれたような灼熱感に襲われた。

（ああ……な、なんなの……この感覚は……?）

魔葉で敏感になつていいのか。唇は黒人の逞しい巨根の形状を、お尻では浣腸器を目で見るように感じ取ってしまう。それほど敏感になつてゐるのに、苦痛がどんどん減つていくのが却つて恐ろしい。

魔葉の効果に追い打ちを掛けるように、猛烈な便意が迫り来る。それは灼熱のマグマが、火口へ向かつてジリジリせり上がつてくるかのようにだつた。

「う、ううむ……んぐっ……はあうん……はああ……お、お腹が……むふううっ! あああっ! も、漏れるうっ! んちゆくちゅんっ」

ペニスを吐き出し、必死に訴えるものの、悪鬼たちに情けなどあるはずがなく、む

しろ悦ばせるだけだった。

「合計で五百万のクスリをそう簡単に出されてたまるものか。漏らしたら娘を臓器売買にかけるぞ」

「あああ、そんな……だめ……娘には……手を出さないでえ……あああううつ」

絶望を突きつけられてブルブルと胴震いが止まらなくなる。締め続ける括約筋は痺れきって、極限の痙攣にヒクヒク戦慄していた。

「さぼるナ、ユミコ。ハアハアッ……ハアアッ！」

休む間もなく長大な剛槍が再び唇を犯す。ボブの息づかい、勃起ペニスの小刻みな拍動などから、汚辱の瞬間が迫っていることを本能的に感じ取る。

（あああ……出される……出されちゃう……この男の……ア、アレを……）

夫の精液すら口にしたことはないというのに、恐怖と屈辱にうなじが総毛立つ。なんとか逃れようと首を振るのだが、豪腕に挟まれた頭はほとんど動かせなかつた。

「フフフ。一つ言い忘れておつたが、そのボブは二十年前にお前の父を爆殺し、今回お前の自宅を爆破した男なのじゃ」

（なんですつてッ!?!）

おぞましい事実を教えられて、憤怒と驚愕とで全身の血が逆流する。

「う、う……むぐぐつ……いひやああ……んんつ、んむう~~~~ツツ！」

（そんな……そんな男のモノを飲まされるなんて……死んでもいやあッ!）

押さえられた頭を振りたくろうとするが、ボブの万力のような握力にはどうやっても勝てない。そんなわずかな抵抗は、むしろ爆弾魔の黒人を悦ばせるだけだった。

「観念するのじゃ羽村祐美子。父と夫の憎い仇の特濃ザーメンを……たっぷりと飲むのじゃ！ ヒハハハッ！」

興奮した金城が皺だらけの顔を歪ませて嘲笑する。老齡ゆえ精力はさほどない。そのぶん有り余る執念をボブという屈強な男の肉体を借りて果たそうというのだろう。

「あうっ……むうんっ！ ら、らめ……いや……いひやあつ……んむふうっ！」

「グオオオオオッ！ イクゾオオオッ！ ユミコオオッ！」

漆黒の獣のように吠えたボブが、腰を一層深く突き入れて、煮えたぎる牡精を解き放った。

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュルルウウ……ッッ！

「んむううっ?! あむぐうう……ッッ！」

大量に撃ち出される特濃ザーメンにむせ返る祐美子。熱くドロドロとした粘汁が舌や歯茎に絡みつき、食道へと雪崩れ込む。さらに飲みきれない精液が鼻腔に逆流し、強烈な牡臭に鼻が腐り落ちてしまおう。

「ヒヒヒ！ 飲めえ！ 一滴残さず飲むんじゃ！」

それに合わせるように、金城もシリンダーをグイグイと押し込んできた。

（いやっ、いやああつ！）

鼻も喉も白濁に埋められてまともに息もできなくなる。さらに腸管までも魔薬に満たされて、魔薬とザーメンの濁流の渦で溺れてしまおう。吐き出したくとも、極太に唇を塞がれてはそれも叶わず、飲み下す以外に手が無い。

「んぐぐつ……むぐつ……ごきゅつ……ごくつ……ごくんつ！」

必死に喉を鳴らし、おぞましい生殖液を嚙下していく祐美子。お尻の穴もヒクヒクと蠢いて、魔薬浣腸を受け入れていく。

「いいぞ、飲み飲み羽村祐美子。それでこそ牝じゃ！」

ついに最後の一押しを押し切る。

「んぐぐううっ！」

ズンツと下腹に響く衝撃に仰け反る。エンジェルフォールを三〇〇ccも注入されたお腹がグルグルと鳴動し、便意が一気に駆け下った。

「あ、あ……あああ、もう……もうらめええっ！ あうおおおっ！」

金城が浣腸器を引き抜くと同時に、肛門はフジツボのように盛り上がる！ 花が咲くように捲れ返らせた中心部から、桃色の浣腸液が飛び散った。

プシヤアアアツ！ パシヤパシヤパシヤアツツ！

「漏らしよったか。だらし無いのお。ホッホッホッ」

「いひやああ……み、見ないれ……ああお……見ないれえっ……あ、あああ、ああああっ」

必死に括約筋に力を込めようとしても、下半身が痺れたような状態で締め付けることができない。ぽっかりと口を開けたアヌスは壊れた蛇口のように垂れ流し状態だ。

「ブシャツ、ブシャアアッ！ ドバ、ドバアアッ！」

「ひいっ……あうっ……見ないで……あひっ……私を見ないでっ……あああむっ」
ヒクヒクと痙攣したかと思うとドツと薬液をしぶかせ、最後には開きっぱなしになった肛門から、内容物までもウネウネとひり出してしまふのだった。

「クハハハハッ。牝メ、最後の一発だ」

惨めさに打ちひしがれる間も与えず、ボブはトドメの射精を祐美子の美貌にぶちまけた。

ドバドバドバアアア~~~~ッ！

「ンああああ……いやああ……あああ……」

(……ああ……お父様……あなた……)

額から眉、鼻筋から唇まで、顔全体を屈辱のザーメンでパツクされてしまう。これ以上ないほどの敗北感を味わわされながら、祐美子の意識は白い闇に沈んでいった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>